



## 『人間の経済』

宇沢弘文 著 新潮社 2017年 192pp.

著者の宇沢弘文さんは1928年鳥取県生まれで、シカゴ大学や東京大学経済学部で教鞭をとり、2014年9月に他界されました。宇沢さんが2009年のリーマンショック後の社会状況をふまえて、近年の講演録をもとに構成した後に体調を崩し、細部校正を行いませんでしたが、その後を引き継いだ遺族や編集部が世に問う、いわば最新の宇沢経済論としてまとめた遺作ともいべき書です。そのため、宇沢さんのこれまでの業績を網羅し、その業績が生まれてくる経緯を、宇沢さん自身の内面からの説明に、遺族や編集部から見た客観的な整理が加わって、とりわけ読みやすく分かりやすい総説となっています。

多くの優れて独創的な論説は、著者がなぜ、その独自の結論に至ったのか、理由を説明しながら、その結論にいたる過程をひもといていきます。しかし言葉に表される意図とは別に、ほとんど語られない自身の体験や、事件、状況を通して培われた潜在的な意識が、それら論説の結論を導く重要な鍵となり、しばしば結論の正当性を強調することがあります。大概の場合表面の言葉から得られる情報以上には詳しい理由を知ることではできませんが、客観的な編集の筆が加わったことで、多くの読者の理解を助けています。

本書『人間の経済』は、そういった意味で、宇沢さんがなぜ、『社会的共通資本』という考えを持ち、その信念を貫いて活動を続けてきたのか。市場原理主義が経済学の主力になる中で、人間性の本質を守るために、もっとも敵愾心を持って行き過ぎた資本主義を打倒すべき対象とする考え方に到るのか。そういう宇沢論が確立するに到る理由と、その問題を解決するための対策として、宇沢さんの経済学の展開が人類社会を癒し、宇沢さんのひらいた経済学は人類がもつべき卓越した思考であることを、うまく伝えてくれる本になっています。

宇沢さんは知る人ぞ知る、経済学者として著名な方で、日本国内というよりも特に世界的に高い評価を受けた研究者です。一般向けに書いた主な著書に『自動車の社会的費用』、『社会的共通資本』（どちらも岩波新書）などがあります。戦後世界の経済学を牽引したシカゴ大学で教鞭をとり、ベトナム戦争時に、学生を戦争に送り込む業務（採点）を拒否して共産主義者として迫害されたこと、帰国後の1990年に現地の人たちや、政界に大きな力をもっていた後藤田正晴からの依頼で成田空港問題などに深く関わっていたこと、地

球温暖化問題の解決に向けて世界の経済学者をリードする対策や考え方を提示してきたこと、ローマ教皇パウロ二世の世界に向けたメッセージ作成に寄与したことなど、本書の中でそれらの経過や、活動を支える必然的な意識が語られます。

その前提として、人類の幸福を追求する、科学や数学をはじめとする教育や、医療や農業、大気や水等の環境など、いくつかの「金に換えてはいけない」「所有者を決めてはいけない」、人類社会にとって欠かせない社会的共通資本という考え方が語られます。研究者としての宇沢さんが社会的正義を追究した、生涯をかけたドラマを読み進めることができます。

本書誕生のきっかけとなった2009年のリーマンショックは、自己本位の金融工学を駆使して粗悪な金融商品“サブプライム・ローン”を生みだし、リーマン・ブラザーズが経営破綻し、連鎖的に対米金融機関が経営危機に陥り、世界経済に多大の影響を与えたものでした。全てを金に換えて、儲けを命題とする市場原理主義がいかに劣悪で強烈に人間性を踏みしめるのか。この事件によって、私たち人類が経験した歴史の記憶と得られた経験知も、後世に伝えていくべき重要な社会的共通資本です。さらに、農業や自然、戦争や医療などをテーマに、政策や条約を含めた法律が世の中にどう悪影響を与え、一方で貢献してきたのかという歴史的な事実を、人間の経済論をベースに説明していきます。

新潮新書編集部が宇沢さんに刊行を依頼し、宇沢さんがこの本の完成をまたずに亡くなったこと、その完成に周囲の協力があつたことが、私たち読者に社会的共通資本の本質を伝える重要なアクセントになっているのかもしれませんが。目の前の経済を優先し、他を顧みず獣心的で短絡的な考えに陥る前に、人間の心を見直し、人間が本来保つべき本当に役に立つ経済を考え直そうとする、『人間の経済』論を追いかけることで、今の時代の混迷の原因と、対処の方針が明らかになっていきます。

宇沢さんの著作を初めて知る人にも分かりやすく、よく知っている人には改めて気づくことの多い本として、お褒めしたい一冊です。

(岩石 真嗣)

